

## ポピュリズム・イデオロギーの動員力

村 松 恵 二

### 目次

- I はじめに
- II イデオロギーとユートピア（普遍化）
- III イデオロギーと幻想
- IV レトリックによる説得
- V むすびに代えて

### I はじめに

ポピュリズム・イデオロギーはどのように形成され、いかなるメカニズムに従って影響力を行使するのか。前稿での議論の結論の一つが〈空虚なシニフィアンの論理〉の重要性であった。<sup>〔1〕</sup> 空

〔1〕 本稿は、拙稿「右翼的ポピュリズムのイデオロギー的特徴」（弘前大学人文学部『人文社会論叢』（社会科学編）第三十号、二〇一三年八月）

虚なシニフィアンは、典型的には、フランス革命のスローガンとなった「自由」「平等」「友愛」に代表される政治理念である。それは、一種超経験的な最高の理想を示す概念であり、社会的統合にはこうした理念が不可欠である。こうした理念をキーワードとして展開されるシニフィアンのシステムがイデオロギーなのであり、その機能は、生活する個人に対して、自己の存在を納得させ、あるいは積極的・肯定的な意味を与えて希望を抱かせる観念であること、換言すれば、社会的政治的動物としての人間に必要な、未来への展望を与えることにある。

敵対する陣営同士の主導権争い・闘争の一環として、空虚なシニフィアンをめぐって、ある言説システムと別の言説システムがヘゲモニーを争うことになる。ここでは、空虚なシニフィアンの奪い合いが生じ、あるいは、どちらの空虚なシニフィアンが魅力の続編である。

をもっているかを争って、人民の支持を奪い合う。そして、闘争の結果うまれる安定した社会においては、支配的イデオロギー、すなわち、ヘゲモニーを確立した空虚なシニフィアン（諸シニフィアンのシステム）によって、社会的統合が達成されることになる。

空虚なシニフィアンが、行動への心理的飛躍を許容する、論理的空白をもつ概念であること、その論理的空白部分に人間の攻撃性が組み込まれ、政治的行動のための心理的飛躍が促されることは、すでに論じてきた。しかし、空虚なシニフィアンは、同時に、将来の豊かな生活を想像させる観念でもあるはずである。政治主体を行動へと駆り立てるためには、希望や願望、幻想、夢、夢想など、将来の豊かな生活をイメージさせる言葉で表現されるものが、同時に、空虚なシニフィアンの中に読み込まなければならない。これも進化の過程で定着してきた社会的政治的人間の自然の一部であり、攻撃性だけを人間の子然として強調してはならないのである。

そして、真に有効であるイデオロギーは、たんに夢を語るのではなく、個人が心理の深層においてもっている欲望を刺激するものになっているはずである。イデオロギーは、呼びかけられた主体（アルチュセル）の将来の生活を刺激するものでなければならず、個人がもっている欲望を刺激するものでなければならぬ。

換言すれば、ポピュリズムのイデオロギー的動員力を正確に分析するためには、そのイデオロギーに、虚偽意識だけではなく、未来への展望を示すユートピア的要素をみる必要があるのである。このユートピア的要素は、想像（イメージ）のレヴェルのことと考えれば、「幻想」あるいは「ファンタジー」という言葉を

用いることもできる。これらの要素が含まれていることが、ポピュリズム運動を進展させる条件である。たとえ妄想に基づいたものであれ、行動への飛躍には〈確信〉が必要だからである。ファンタジーが空虚なシニフィアンに読み込まれることによって運動が拡大するのである。

このユートピア的要素が、ポピュリズム・イデオロギーにどのような組み込まれているのか、そのイデオロギー特有のテクニクとして、いかなるレトリックが用いられているのか。本稿が明らかにしようとしているのはこれである。

## Ⅱ イデオロギーとユートピア（普遍化）

### 1 ジェイムソンの「政治的無意識」論

イデオロギーの本質を虚偽意識にみるイデオロギー論への批判については、すでに前稿において述べた。本章では、まず、フレドリック・ジェイムソンの「政治的無意識」の議論から検討を始めよう。ジェイムソンは、伝統的マルクス主義の硬直的な文化・文芸理解（イデオロギー理解）を克服することによって、包括的な文芸理解を実現しようとしている。いわば、ポスト・マルクス主義あるいはネオ・マルクス主義の立場に立つアメリカの文芸評論家である。

イデオロギーとユートピアとを対比させつつ論じたマンハイムとは異なり、ジェイムソンは、ユートピア的要素を、むしろイデオロギーの不可欠の要素として、イデオロギーの中に組み込むとする。〈イデオロギーはユートピアである〉あるいは〈イデオ

ロギーにはユートピアが必要である」、これが基本的主張であろう。人間は社会的政治的動物であり、生きるために、未来への展望、すなわちユートピアを必要としているということである。

### 抑圧としての文化

ジェイムソンの主張は、その主著の表題と副題によって端的に表現される<sup>②</sup>。彼は、西洋の文化全体の本質が精神分析的意味での「抑圧」にあると考えている。社会システムの矛盾からくる苦痛を抑圧しているのが文化であり、無意識下に抑圧されているものが、すなわち表題「政治的無意識」に表現されている。抑圧行為のあり方を示している概念が、「社会的象徴行為」であり、「社会的象徴行為としての物語」——これが副題——がイデオロギーなのである。

ジェイムソンによれば、社会的政治的動物としての人間は、イデオロギーによって、社会システムの矛盾からくる苦痛を、想像の世界において「解決」しているのである。革命によって現実の矛盾が解消されるまで、抑圧が継続される、というのである。つまり、ジェイムソンが「無意識」という言葉で意味しているのは、「人間社会による歴史的矛盾の集団的否定・抑圧」<sup>③</sup>である。

ジェイムソンは、イデオロギーに対する解釈を二つに分ける。(1)否定的な解釈と(2)肯定的な解釈である。彼は、否定的な

② フレドリック・ジェイムソン『政治的無意識——社会的象徴行為としての物語』(大橋洋一ほか訳、平凡社、二〇一〇年) 以下では、本書からの引用は、ページ数だけ示す

③ ウィリアム・C・ダウリング『ジェイムスン・アルチュセール・マルクス——〈政治的無意識入門講座〉』(辻麻子訳、未来社、一九九三年)、一五四頁。

イデオロギー解釈として、イデオロギーを虚偽意識ととらえる伝統的なマルクス主義の議論をあげる。また、肯定的な解釈とは、イデオロギーが同時にユートピア的な力をもつことを明らかにしようとする解釈のことである。

そして、ジェイムソンの戦略は、否定的なイデオロギー観、つまり虚偽意識としてのイデオロギーという理解を捨てることなく、それに肯定的なイデオロギー観を取り入れること。これによって、彼は、マルクス主義のイデオロギー論の幅を広げること、実践的活動に役立つイデオロギー論を形成することをめざすのである。

すなわち、ジェイムソンによれば、マルクス主義的イデオロギー分析は、否定的解釈学(いわゆるイデオロギー批判)とともに、マルクス主義の肯定的解釈学、つまり、まだイデオロギー性〔虚偽意識〕がたつぷり染みついている同じ文化テクストのなかにユートピア衝動をあぶり出してゆくことと同時に起こるわけなければならない(五四二頁)という。さらにこれを言い換えて、道具性重視の分析(民衆をだます道具という理解)は、集団重視の連合的な、あるいは共同体重視の文化読作業と手を携えるべきである、という(五四二頁)。つまり、民衆をだます道具としてのイデオロギーという理解(否定的解釈学)を補うために、集団や共同体を維持するために、つまり社会的統合機能をはたすために、不可欠な文化的要素として、イデオロギーを理解する必要があるということである。肯定的解釈学をさらに言い換えて、マルクス主義は、「文化対象が同時にユートピア的な力をもつことを立証するよう努め」なければならない、とも述べている(五三四頁)。

そして、ジェイムソンは、この、ユートピア的要素（ユートピア衝動、ユートピア的な力）にこそ、政治的無意識が現われていると理解しているのである。彼の狙いは、人びとの政治的無意識を意識的なものにし、そこに現われるユートピア的願望が政治社会システムの変革実践によって実現されることを読者に示すことなのである。

#### 封じ込め戦略（包摂戦略）としてのイデオロギー

こうしたイデオロギー理解を、ジェイムソンは、〈イデオロギーは封じ込め戦略である〉と定式化する。ジェイムソンは、マルクスの『ブリュメール十八日』における、プチ・ブルジョアジーのイデオロギーについての分析を手がかりに、イデオロギーを「封じ込め戦略 strategy of containment」（八六頁）としてとらえる。この場合、「封じ込め」とは、人びとの行動を既存の支配システムの枠内に封じ込めるということである。支配システムから受ける苦痛がシステムを破壊する行動（革命）へ発展しないよう、支配構造の枠内に永遠に封じ込められるものとして、イデオロギーをとらえようとするのである。

ダウリングを援用して説明するなら、ジェイムソンにとって、あらゆるイデオロギーは、社会の表面下に隠れた耐えがたい矛盾——社会における支配・被支配関係——を否定する手段であり、同時に、人生を何とか耐えうるものにする代替真理を作り上げる手段でもある。<sup>④</sup>つまり、支配層、被支配層に関わりなく、生きているつらさを耐えうるものにするために、人間は現在の自己のあり方を正しいものとして理解・納得したいのだという。そのた

④ ダウリング前掲書、六六頁。

めの、理論的枠組み、首尾一貫した世界観や理論こそが、ジェイムソンにとってのイデオロギーなのである。

ダウリングによれば、ジェイムソンの「封じ込め戦略」は、マルクスその人のイデオロギー観に合致する。マルクスの見方とは、イデオロギーは、経済自体によって押しつけられた制約であり、そのため人びとは現在の悲惨の本当の原因がわからなくなり、やがて、何らかの形式の一貫性や理解可能性をみずから与えるシステム（宗教、哲学、神話など）を発明することになる、という見方である。<sup>⑤</sup>

ダウリングの理解では、結局、マルクスにとっても、ジェイムソンにとっても、イデオロギーとは、人類が目下そのもとで生きている経済的秩序〔客観的存在としてのシステム〕によって押しつけられた誤った枠の中で、何とか世界を一貫したものとして理解したいという願望——これがユートピア的要素であり、政治的無意識の現われ——にもとづく想像的努力から生じたものであるというのである。<sup>⑥</sup>イデオロギーとは、「現実の矛盾の象徴的解決としての文化的創造物」であり、「生きたジレンマの耐えがたさを想像のレベルで解決する試み」<sup>⑦</sup>なのである。

#### 全体性

ところで、ジェイムソンにとって、イデオロギーが〈ユートピア的要素を含む〉のは、集団を統一させるためであった。ジェイムソンは、アルチュセールを援用しながら、「アルチュセールに

⑤ 同上、九九、一〇〇頁。

⑥ 同上、一〇〇頁。

⑦ 同上、一六〇頁。なお、ジェイムソンについては、アダム・ロバートも参考になっている。Cf. Adam Roberts, Fredric Jameson, 2000.

よれば、個人主体が超個人的な諸現実——たとえば、社会構造とか集団の論理によって支えられる〈歴史〉——と彼ないし彼女との生きた関係を、思い描いたり想像したりするとき、そのような思い込みを可能にする表象構造が、イデオロギーである」（四六頁）と述べている。つまり、ユートピア的要素は、社会的統合という機能と不可分に結びついているのである。

そして、社会的統合機能をはたすために、イデオロギーは、共同体あるいは全体と個人とを結びつける論理をかならず含んでいる。それゆえ、イデオロギー概念は、全体概念を含み、全体概念によって個人ないし部分集団を包摂しようとする。そして、部分的利益や意志を全体の利益・一般的利益に包摂するために、イデオロギーは、普遍化の論理を形式としてもつことになるのである。以上のように、ジェイムソンは、彼のいう「伝統的な」マルクス主義が、イデオロギーを虚偽意識と同義とすることを前提にして、マルクス主義を「修正」し、イデオロギーのもつ普遍的要素（ユートピア的要素）を強調したのである。

## 2 マルクスはどうに理解していたのか

では、マルクスは本来どのように考えていたのだろうか。ここでは、マルクスの読み直しを通じて、そのイデオロギー概念の再定義をめざす渡辺憲正の議論を検討しよう。<sup>⑧</sup> 渡辺は、リベラリズムがイデオロギーとして批判されることがほとんどなく、他

⑧ 渡辺憲正『イデオロギー論の再構築——マルクスの読解から』（青木書店、二〇〇一年）以下では、この図書からの引用は、本文にページ数のみ示す。

方、イデオロギー批判にもとづくマルクスの理論がまったく無視される状況の中で、マルクスの救出をはかっている。

渡辺は、一方では、ジェイムソンと同様、マルクスのイデオロギー概念を狭くとらえて、虚偽意識と同義とすることに反対する。他方では、渡辺は、「労働者階級のイデオロギー」（レーニン）というような形で、イデオロギー概念を拡張することにも反対する。彼は、レーニンに代表される伝統的マルクス主義のイデオロギー論から一線を画し、現在刊行中の『マルクス・エンゲルス全集』（いわゆる新メガ）も考慮に入れつつ、マルクスのイデオロギー概念を再定義しようとするのである。

### 理念の自立

渡辺のイデオロギー論においては、マルクスのイデオロギー概念の指標は二つ、すなわち、「自立した理念と社会的統合」（九二頁）である。あるいは、「イデオロギーの指標は、社会的統合に関わる自立的理念の存在である」（二六四頁）とも述べている。まず、理念の自立——渡辺の表現では、「理念〔意識形態〕の自立化」（八八頁）——から検討しよう。

そもそも、渡辺において、理念とは、「理想化された観念」（五四頁）を意味する。また、理念とは、観念ではあるが、とくに「人間の普遍的あり方（本質）を理想化して表現する観念」<sup>⑨</sup>（五四

⑨ 本来、ここでの引用は、文字通りには、「理想化され、自立化した観念」（五四頁）である。この引用においては、自立化した観念を理念と定義しているが、渡辺は「理念の自立化」をイデオロギーの指標の一つとしているので、自立した観念が再度自立することになり、二重に自立していることになる。論旨不明になるので、ここでは、理想化された観念を理念として理解しておく。



頁)とも言い換えている。理念の具体例として、渡辺は、「政治的解放において目的とされる自由、平等、所有権などの普遍的法(権利)」(五四頁)をあげている。つまり、彼にとつて理念とは、近代の市民革命とともに成立した、自由、平等、所有、人格、人権などの、自由主義・民主主義の法・政治理論の中核概念を指しているのである。

この理念が「自立する」とは何を意味するのか。渡辺は、『ドイツ・イデオロギー』から引用しつつ、「理念の自立化」とは、理念が、支配階級のイデオログによって、「すべての社会的諸関係を生み出す力であり、すべての社会関係の目的である」とみなされるようになっていくことである、という(八八頁)。明らかにこれは、理念の自己展開としての歴史というヘーゲルの思想、あるいはマルクスが『ドイツ・イデオロギー』において批判したB・バウアーなどの思想を念頭においたものであろう。つまり、唯物論の立場からみれば、現実の社会関係が諸理念を生み出しているはずであるが、支配層のイデオログにおいては、その主客が転倒し、理念が現実の社会関係を生み出す力をもっているかに思われている。これが渡辺のいう「転倒性」である。そして、そうした状態にある諸理念のシステムがイデオロギーだといっているのである。

結局、渡辺のいう「理念の自立」とは、自由、平等、所有、人格、人権などの、自由主義・民主主義の法・政治理論の中核概念が、それ自体普遍的価値をもっており、それらの理念が「社会的諸関係を生み出す力」をもっていると見なされるようになっていくことなのである。

### 思想の普遍化と社会的統合

では、なぜ理念が自立してイデオロギーになることが必要なのか。それは社会が分裂するのを防止するというイデオロギーの社会的統合機能と関係する。渡辺にとって、マルクスのイデオロギー概念の第二の特徴は、「社会的統合」である。すなわち、「イデオロギーは……社会的統合に関わる性格を持つ」(八九頁)。「社会的統合」は重要なキーワードであるのだが、渡辺はかならずしも詳細には論じていない。その必要がないのである。なぜなら、彼のいう「社会的統合」とは、「思想による支配」を意味しているものと考えられるからである。渡辺は『ドイツ・イデオロギー』から引用しながら、支配的思想(支配階級の思想)が自立して、歴史の中ではつねに思想が支配するかに見えるようになることを論じる際に、「歴史における思想による支配」を「社会的統合」と言い換えている(八九頁)。ただし、社会的統合とは、イデオロギーの状態を表現するのではなく、社会の分裂を防止するというイデオロギーのはたす(社会的機能)である。思想による支配とは、支配的思想による社会的統合ということであろう。つまり、社会的統合機能をはたすために、理念(思想)が自立するのである。

そして、支配的思想が社会的統合機能をはたすためには、普遍性を獲得しなければならない。この「支配的思想の普遍化」が渡辺のイデオロギー論のキーワードであり、理念の自立と社会的統合機能とを結んでいる。彼は『ドイツ・イデオロギー』を援用しながら、旧支配階級に取って代わろうとする新しい階級は、自らの階級の利害を社会の全構成員に共通の利害として示すことを余

儀なくされることを指摘する(九〇頁)。すなわち、思想(支配階級の利害)に普遍性の形式(社会の全構成員の利害)を与え、普遍妥当な思想(理念)として示すことが必要になるということである。これが、渡辺のいう「支配的思想の普遍化」である。イデオロギー概念の特性は、「階級の基礎をもつ理念が現実的諸関係から自立させられ、普遍的形態をおびるところにある」(九九頁)。

ここまでの論述からわかるように、渡辺にとって、理念の自立と支配的思想の普遍化はほとんど同義である、あるいは同一の事態の二つの側面である。両側面とも、理念がイデオロギーになり、社会的統合機能をはたす(理念が自立して普遍的価値をもつ)ために、支配的思想の普遍化が不可欠なのである。渡辺は、既存の支配・被支配秩序を、たんに正当化するだけでなく普遍化する理念が、イデオロギーになる、という。つまり、イデオロギーには普遍的要素が含まれる、あるいはイデオロギーは、社会構成員全員の利益が実現するという普遍的形式をとる、ということである。渡辺によれば、理念は、現実的根拠から分離して自立したとき、イデオロギーに転化する(九六頁)。また、「イデオロギーの指標は、社会的統合に関わる自立的理念の存在」(一六四頁)なのである。

結局、渡辺にとって、イデオロギーとは、「現実的な支配的諸関係から自立化させられた理念にもとづき、歴史における思想の支配(社会的統合)を本質的規定としてもつ支配的諸思想」(九一頁)なのである。つまり、(現実的支配関係から自立させられ、社会的統合機能をはたしている支配的思想がイデオロギーである)ということであろう。

ここまでくれば、渡辺の議論が、イデオロギーにユートピア的要素を見いだしたジェイムソンの議論と符合する点があることに気づく。渡辺のいう、理念の自立、支配的思想の普遍化、社会的統合は、すべて、イデオロギーにユートピア的要素が含まれていることを主張していると見なすことができるからである。

#### 虚偽性

両者の差異を探ろうとすれば、問題は虚偽意識の要素であろう。すでに述べたように、ジェイムソンは、「否定的解釈学」という言葉で、イデオロギーの虚偽性を強調する伝統的マルクス主義を指示し、その欠陥を補うものとして自分の理論を位置づけていた。しかし、彼のいう虚偽性とは、嘘をついて人民を欺くというような意味である。むしろ政治においては、根拠のないウソが述べられることもあるが、以下で説くように、渡辺のいう虚偽性はこれとは異なる。ジェイムソンのように、ポストモダン主義の議論から強い影響を受けている場合、事実そのものが構成(構築)されているという認識に立つために、(真理か虚偽か)は、直接問題にはならなくなるのである。

また、マンハイムのように「存在被拘束性」を強調するならば、彼の「評価的・動的イデオロギー概念」を考慮に入れたとしても、支配階級であれ、被支配階級であれ、すべての社会集団、すべての階級の思想が存在被拘束性をもつために、(真理か虚偽か)をめぐっては、それぞれの認識の相対性が強調されることになる。それに対して、渡辺は、イデオロギー概念を虚偽意識と同義とすることは反対しつつ、しかし、マルクスのイデオロギー概念が虚偽性という要素をもつことを確認する。「たしかにマルクス

は、イデオロギー＝虚偽意識と定義したことはない」（九九頁）が、マルクスはイデオロギーが虚偽性をもつことも指摘していたと主張する（一〇〇頁）。そして、渡辺は、イデオロギー概念を支配的思想に限定している。労働者階級のイデオロギーというように概念を拡張することに反対する。支配的思想がどのようなメカニズムで虚偽性をもつようになるのか、渡辺の論理を追ってみよう（九八頁以下）。

渡辺によれば、まず、支配的な社会的諸関係が基礎として存在する。これが支配階級たるブルジョアジーの存在条件であり、彼らのイデオロギーはそれを反映する。したがって、ここには階級の利害が反映している。しかし、「階級性だけではイデオロギー概念を構成しない」。肝心な点は、「階級の基礎をもつ理念が現実的諸関係から自立化させられ、普遍的形態をおびるところにある」（九九頁）。イデオロギーは、この支配階級の利害を、理念として、すなわち「普遍的に、万人に妥当するものとして」表現する、つまり「階級を超えた表現をとる」というのである（九八頁）。この普遍性のおおいはき取り、階級的利害を暴露することがマルクス主義のいう（イデオロギー批判）にはかならない。

渡辺の議論においては、イデオロギーのもつ特徴として、理念と社会的諸関係との関係の主客を逆に理解する「転倒性」、普遍的妥当性をあたえられることによって生じる「幻想性」、現実の社会的諸関係に照応していない意識という意味での「虚偽意識」が指摘されている（九九頁）。これらの特徴を総合したものがイデオロギーの虚偽性ということであろう。これに関連して、渡辺が援用している『ドイツ・イデオロギー』からの引用は、以下の

ようになっていいる。すなわち、「支配階級の内部分裂および被支配階級との分裂が大きくなればなるほど、上記の交通形態にもとも照応していた意識は、当然、ますます真ならざるもの、すなわち、交通形態に照応する意識であることをやめる」。また、「これらの交通諸関係についての以前あった伝来の表象は……ますます理想論を弄ぶ空文句、意識的な幻想、故意の虚偽に落ち込んでいく」（二〇〇頁）<sup>10</sup>。

しかし、この引用から、なぜ渡辺は、以下のような、イデオロギーのもつ虚偽性の指摘に消極的であるかに見える主張を導き出すのだろうか。渡辺は、「イデオロギーが虚偽意識とまったく異なるというのはいいすぎであろう」（九九頁）と述べ、イデオロギーが「虚偽意識に転化する可能性も否定されていない」（一〇〇頁）と主張しているのである。

ここでは、イデオロギー概念における虚偽性の問題を以下のように考えておこう。すなわち、イデオロギーの形成過程においては、支配階級の利害が社会の全構成員の利害として、特殊な利害が普遍的利害として表現され、それによって社会的統合機能がはたされる。その際、支配階級のイデオロギーは、自己の利害（特殊利害）を社会の全構成員に共通の利害（普遍的利害）と思い込んでおり、正確な現状認識ができなくなっている。これが虚偽意識をもっているということである。イデオロギーが社会的統合機能を果たすことと、イデオロギーが普遍性の形式をあたえられて

<sup>10</sup> 渡辺、前掲書、一〇〇頁。『ドイツ・イデオロギー』からの引用は、大月書店版『マルクス・エンゲルス全集』第三巻、三〇二頁、ただし、訳文は渡辺のものである。



いること、ここに虚偽性が関わるのである。渡辺の指摘する「転倒性」「幻想性」「虚偽意識」は、このイデオロギー形成にともなう虚偽性の諸側面なのである。

イデオロギーには、支配階級の利益とともに被支配階級の利益も部分的に表現されている。社会の全構成員の利益がどの程度実現されているか、その度合いが〈虚偽性の程度〉を決定する。被支配階級の利益を実現できなくなったとき、イデオロギーとそれにもとづく制度・システムの虚偽性は高まり、イデオロギーの信念も動揺する。イデオロギーが社会的現実を正確にとらえることができなくなり、イデオロギーの社会的統合機能も失われる。ある段階で、被支配階級は完全に古いイデオロギーから離れ、新たなイデオロギーと制度・システムを求めることになるのである。この理解は、上述の、『ドイツ・イデオロギー』からの引用文とも矛盾しない。

#### 物象化とイデオロギー

イデオロギーの虚偽性との関わりで問題になるのは、いわゆる「商品の物神性」をめぐる議論であろう。近年では、イデオロギー概念と「商品の物神性」概念とを同一視する見解もみられる。それによれば、マルクスのイデオロギー概念は、『ドイツ・イデオロギー』執筆以後、理論の前面から後退し、『資本論』においてふたたびイデオロギーの概念が取り上げられるときそれには物神性という名前が与えられた」というのである。<sup>11)</sup>商品の物神性とは、人々が商品を物神(呪物)のように意識し、貨幣(交

<sup>11)</sup> 『マルクスカテゴリー事典』(青木書店、1998年)、「イデオロギー」の項目

換価値、商品の完成形)を求めて行動すること、貨幣が聖なる力をもっているように感じ、拝金主義的性向をもつことであるが、この意識傾向がイデオロギーであることになる。商品を物神とする意識は、イデオロギーなのであるか。

渡辺は、こうした見解に立つ論者として、テリー・イーグルトンとスラヴォイ・ジジエクについて論じているが、結論的には、こうした見解を否定する。すなわち、マルクスの土台・上部構造論を前提にするなら、物象化された意識は土台に属する現象であり、イデオロギーを物象化と一体化するのは、土台・上部構造論の枠組みを崩すことになる(二〇五頁)、と。渡辺によれば、物象化現象、商品の物神性(「商品世界にまとりつく物神崇拜」)は、土台に属する現象であり、他方、イデオロギーはあくまでも上部構造に属する現象なのである(二〇五頁)。

ところで、藤田勇は、すでに、一九七〇年代に、法と経済の関係についてのマルクス主義的議論の古典ともいえるべき著作において、『ドイツ・イデオロギー』<sup>12)</sup>の解釈として、人間の精神的生産に二つのレベルがあることを指摘していた。

第一は、「人間の物質的活動および物質的交通のうちに、現実的生活の言語のうちに直接おりこまれている」ところの「観念、表象、意識の生産」であり、これは、「まだ彼らの物質的行動の直接の流出として現われる」という。第二のレベルは、「一つの民族の政治、法律、道徳、宗教、形而上学などの言語に示され

<sup>12)</sup> マルクス／エンゲルス『ドイツ・イデオロギー』、岩波文庫版(古由重訳)では、三二、三九頁。新日本出版社版(服部文男監訳)では、二六、二七頁、三九、四〇頁。

るような精神的生産」であり、藤田は、これは直接の物質的活動とは独立に行なわれる精神的生産である、としている。藤田によれば、この精神的生産の独立化の前提は、分業である。「物質的労働と精神的労働との分割」が生じると、その瞬間から、「意識は、現存する実践の意識とは何か別のものであるかのようになる」「意識は世界から解きはなたれて『純粹』理論、神学、哲学、道徳などの形成へ移っていくことができるようになる」と、『ドイツ・イデオロギー』から引用しつつ、主張する。<sup>13</sup>

ここでは、藤田のいう第一のレベルが重要である。それは、土台（物質的生産）に属する精神的活動があることを指摘しているからである。土台・上部構造論との関連で、精神的活動は上部構造に属するものという観念が一般化しているかもしれないが、むしろ、物質的生産、経済活動も人間行動であり、当然のこととして行動するための意識・意図を必要とする。藤田を引用するなら、「個別的経済過程が意識的・意思的行動により媒介されること」<sup>14</sup>が否定されてはならないのである。

問題は、マルクスの指摘する商品生産社会における神秘性、人間と人間との関係がものとの関係として現われること（物象化）、商品（その完成形態としての貨幣）が物神（呪物）として崇拜されるようになること（拝金主義）は、イデオロギーの範疇に入るのかということである。

商品が物神としての性格をもつようになることは、商品生産社会における経済行為を成立させる基礎となっており、集団所屬に

<sup>13</sup> 藤田勇『法と経済の一般理論』（日本評論社、一九七四年）二八頁。

<sup>14</sup> 同上、四一頁。

関わりなく現象する。つまり、支配階級であれ被支配階級であれ、資本家階級であれ、労働者階級であれ、すべての個人が抱く経済意識（交換価値・貨幣を獲得しようとする意識）なのである。それに対して、イデオロギーは、労資対立をはじめとする土台における敵対関係を「克服」し、社会的統合を達成するために必要な上部構造（法律や国家やイデオロギー）の一部として位置づけられている。イデオロギーなしには、こうした制度・機構による支配や統合が機能しなくなるのである。商品の物神性にとらわれた意識とイデオロギーとは、範疇を異にする概念というべきなのである。

### Ⅲ 精神分析における幻想

さて、ポピュリズム運動が急速に勢力を伸張する事態を明らかにするために、ポピュリズム運動の支持者たちが、いかなるプロセスとメカニズムのもとで、ポピュリズム・イデオロギーに確信を抱き、行動へと飛躍するようになるのかが解明されなければならない。

すでに、人間の攻撃性に焦点を当てて、ポピュリズム・イデオロギーが、無意識に抱いている欲望に働きかけるものであることについて、動物学の知見をもとにした議論を参考に検討した。<sup>15</sup>

ここでは、さらに、人間の意識下の欲望に焦点を当てて論じている精神分析学派の「幻想」についての議論を参考に、さらに検討を重ねてみたい。この領域については、フロイト派やラカン派の

<sup>15</sup> 前掲拙稿、一七頁以下。

膨大な研究業績があるが、さしあたり、ここでは、「ラカン派精神分析」の立場から社会学を展開しようとしている樫村愛子の議論を取り上げて検討しよう。<sup>16)</sup>

### 幻想（ファンタジー）とは何か

精神分析においては、一般的には、幻想（ファンタジー）とは、「その中に主体が登場する想像上の脚本であり、そしてその脚本は、防衛過程によって多少とも歪曲されたかたちで、欲望の、つまるところ無意識的欲望の充足をあらわしている」と理解されている。この定式において確認するべきは、幻想とは、主体がそれなりの位置を占める物語り（脚本、筋書き）であること、その物語りにおいて、主体が無意識下で抱いている欲望の充足が心理の最深部における原動力になっていること、である。

こうした一般的理解を基礎に、樫村は、幻想が「文化的価値や理想」であることを強調しつつ議論を展開する。精神分析一般と同様、樫村にとっても、議論の出発点は、幼児期の母と子（主体）との一体関係とそこでの充足状態である。成長とともに、主体はこの状態から引き離されて自立し、社会性を身につけ、言語による意識の世界（文化の世界）に入るのである。そして、失われた母子一体感と充足感の回復が、無意識の欲望として、個人の精神活動に影響を及ぼし続けると考えられているのである。

<sup>16)</sup> 樫村愛子『ラカン派社会学入門——現代社会の危機における臨床社会学』（世織書房、一九九八年）以下では本書からの引用は、本文中にページ数のみ示す。

<sup>17)</sup> J・ラブリランシュ、J・B・ボンタリス、精神分析用語事典（村上仁監訳、みすず書房、一九七七年）。P・コフマン編『フロイト&ラカン事典』（佐々木孝次監訳、弘文堂、一九九七年）も、この定義から説き起こしている。

樫村にとって、幻想とは、失われた母子一体感と充足感の回復という無意識の欲望が原因となつて、意識の世界・文化の世界で現われる現象である。幻想は、母子一体状態における充足感を失い、過酷な現実と向かい合うことを余儀なくされた主体が、過酷な現実認識から自己を防衛するための、防衛機制の一つなのである（四六頁）。それは、「主体が自己」、あるいは自己と世界の関係についてもつ、一つの固定した『良い』イメージ（像）であり、「そのイメージを維持し続ける作用」（四六頁）のことである。この幻想の根底にあるのが母との原初的な関係であり、この関係を幻想は再現し続ける、と主張するのである。すなわち、樫村にとって、幻想とは「母との密着した関係に支えられ、そこでの充足を再現しようとするような運動」（四六頁）である。

具体例でイメージを膨らませよう。樫村によれば、コミュニケーションに際して、人びとは、相手に正確に伝わっているかどうか確かではないにもかかわらず、つねに相手の好意を無意識で前提にし、伝わったつもりになっているが、これこそ幻想であるという。また、好意をもち自己を迎え入れるような抽象的な他者を想定している、これが他者幻想であるという。

樫村は、この幻想、すなわち母子一体感の再現を求める運動が、文化や社会の根幹になっていると考えているようである。樫村は主語と述語を入れ替えながら、以下のように主張しているからである。すなわち、「文化とは、理想や力や善といった何らかの価値（幻想の対象）を措定し、それを軸に共同体や家族の現実的關係を糾合し再生産していくもの」（四八頁）である。また、「価値や理想をめざす幻想の働きは、無意識の性的なものが意識

（文化）の中で、さまざまのねじれや抑圧をはらみつつ『再現』されていく」（四九頁）ことである、と。

また、樫村によれば、「この幻想を、明示的な意味・意識の領域に翻訳したもの」が、「文化的な価値や理想」（四七頁）である。つまり、樫村のいう「幻想」の内容は「文化的な価値や理想」と言い換えることができる。樫村においては理想化と幻想化とは同義である、とさえいえる。じつさい、「理想化（幻想化）」（五〇頁）という叙述もみられるからである。

#### 幻想とイデオロギー

そして、本稿との関わりで重要な点は、樫村が、文化的な価値や理想（幻想）を「イデオロギー的・社会的なもの」から区別している点である。樫村は、その根拠を、幻想が「主体の無意識的・原始的な部分に根ざしている」（四六頁）ことに見いだしている。つまり、幻想は、イデオロギー（政治的社会的価値）ではない。幻想は、人間関係でいえば、他者との一体感、また、コミュニケーションを成立させる基礎となっている集団の一体感の問題であろう。集団の一体感を求め、あるいはその集団の一体感が存在しているという想定こそが幻想の内容である。

では、幻想とイデオロギー（政治的社会的価値）とを明確に区別できるのか。樫村の主張する幻想の意味と機能は、一言でいえば、意識的行動の裏で、無意識的に、母子一体感のようなすべてが許される一体感が求められているということである。この一体感が集団的なたちで求められているとすれば、それをイデオロギーと区別することは現実的には難しくなる。たしかに、文化的な価値や理想（幻想）と政治的社会的価値（イデオロギー）と

は、概念的にはあくまで別物である。しかし、現実には、樫村のいう幻想とイデオロギーとの区別は困難になる。むしろ逆に、幻想とイデオロギーとの融合によって、イデオロギーと無意識的欲望のあいだで相乗効果が発生し、いっそうダイナミックな力（動員力）が発揮されることになるのではないか。

ジェイムソンが指摘した、イデオロギーにおけるユートピア的要素、また、渡辺の主張する、理念の自立、支配的思想の普遍化、社会的統合などは、すべて、イデオロギーに含まれるユートピア的要素、共同体を統合する（全体化の）機能を指摘するものであった。さらに、樫村の指摘は、文化を成立させる基礎として、母子一体感の再現を求める無意識的欲望が存在していることを明らかにした。いずれも、イデオロギーがもつ動員力の分析に不可欠の観点というべきであろう。

#### Ⅳ イデオロギーに固有のレトリック

これまでの論述によって、動員力をもつイデオロギーは、将来への見通しを示すことのできる論理——それは本質的にユートピア願望を内包している——と無意識的欲望に訴える心理機制をもつことが必要であることを明らかにしてきた。イデオロギーを容れているものは、何らかの満足感を提供されているはずである。このプロセスはイデオロギーの受容者を説得する過程であり、動機付けの過程でもある。この過程は、まったくうわべだけのこともありうる。たとえば、ジェイムソンにとっては、イデオロギーとは、危険で政治的なものになりかねない衝動を、管理し

拡散し、回路を変え、うわべだけの充足物を与えるプロセスであつた（五二六頁）。

この説得を実効あるものにするための、イデオロギーに固有のレトリックがあるのか、説得に用いられるレトリックには、どんなタイプがあるのか、それはどのような論理的機制をもっているのか、これが本章の問題である。

#### イデオロギーの特徴的論理

まず、テリー・イーグルトンのイデオロギー論を検討しよう。イーグルトンは、イデオロギーに固有のレトリックを直接論じているわけではないが、六点にわたってイデオロギーの特徴を論じている。<sup>18</sup>それがレトリックに通じていると考えられる。また、イーグルトンは、これらのイデオロギーの特徴が、支配的イデオロギーだけではなく、対抗的イデオロギーにも当てはまることを結論として指摘している。

イーグルトンの指摘する第一の特徴は「統一化」である。すなわち、イデオロギーは、「それを信奉する集団なり階級をひとつにまとめ」、アイデンティティを与える。それによって、「特定の集団なり階級が、社会全体にある種の統一をもたらしことを可能にする」ものである（八九頁）、と。さらに、イーグルトンは、統一化にとつて重要なこととして、多様な要素が混在していることを指摘する。すなわち、支配的イデオロギーは、「さまざまな要素がつねにせめぎあい葛藤状態にある」（八九頁）。むしろそれ

が強みになっており、「多様な場から語りかける」ことになって、さまざまな非難をかわすことができる（九〇頁）、と。ここには、支配的イデオロギーが、多様な利益集団の利益をまとめて、社会的統合をはたすための論理を展開するさまが見てとれる。イデオロギーには、どの集団の利害をも満足させるような多様な要素が含まれることになる。

第二の特徴は、イデオロギーの行動志向である。イーグルトンによれば、「イデオロギーが成功するには、実践面と理論面両方で機能し、このふたつのレヴェルをリンクさせる方法を見いださねばならない」（九四頁）。さらに、イーグルトンは、M・セリガーやレイモンド・ウィリアムズを援用しつつ、イデオロギーにおいては、「分析的で記述的な陳述」と「道徳的で専門的な規範」とが混合されていること、また、感情的要素が含まれていることを指摘する（九五頁）。つまり、イデオロギーの受容者を行動へと促すために、イデオロギーにおいては、レトリックのあり方として、事実認識に道徳的規範・命令に関わる記述が追加され、感情的要素がちりばめられているということである。

第三の特徴は、イデオロギーには、「社会的利害関係を合理化 rationalizing」（一〇〇頁）する記述が含まれている点である。イーグルトンは、合理化という観点からは、「イデオロギーとは批判の対象になりそうな社会的行為に対して、もっともらしい説明なり正当な理由を提示せんとする多かれ少なかれシステムティックな試み」（一〇一頁）であると主張する。イーグルトンが合理化概念を精神的カテゴリーとして理解していることから推測できるように、この引用を、イデオロギーには、言い逃れ、ある

<sup>18</sup> テリー・イーグルトン『イデオロギーとは何か』（大橋洋一訳、平凡社、一九九六年）八九頁以下。以下では、本書からの引用は、本文中にページ数のみ示す。



いは弁明のための論述（レトリック）が含まれると理解することができる。

第四の特徴としてイーグルトンがあげているのは、イデオロギーのもつ「正当化 legitimization」機能である。これは、「支配階級が従属階級の側に、権威の所在が支配階級の側にあることをすくなくとも暗黙のうちに認めさせる過程」（一〇五頁）である。しかし、この機能は、イーグルトン自身が認めているように、かならずしもイデオロギーだけに固有の特徴ではない。支配的制度を全体として正当化するメカニズムの一環としてイデオロギーも役割をはたすということである。

第五の特徴は、イデオロギーには、「普遍化 universalizing」の論理が組み込まれていることである。すなわち、ある特定の場所や時代に固有の価値や利害などを「人類全体の永遠の価値や利害にみせかけること」（一〇八頁）である。イーグルトンは、これを、正当化のための重要な方法として理解している。イーグルトンにとって重要なのは、説得の材料として、「ある階級の利害が他の階級の利害と一致していることをもちだすことではなく」（二〇九頁）、「みずからをどう説得力のある形でしめすか」（二一〇頁）ということである。その具体例は、ブルジョアジーが「自由、正義、平等など」の普遍的価値を掲げたことである、という。

第六に、成功したイデオロギーは、ある信念を「自然なもの、自明なもの」つまり、「社会的『常識』と一致しているように見せかけ」、「それ以外の信念を想像できないようにさせる」（二一二頁）。これがイーグルトンの指摘する「自然化 (naturalize)」

である。自然化も、普遍化と同じく、歴史的なものを脱歴史化する。つまり、観念や信念が特定の時間や場所や社会集団に固有のものであることを否定する。イデオロギーは、歴史を第二の自然として凍結する。歴史を不可避のもの、変更不可能なものとする（一二三頁）。それゆえに、イデオロギーには、「もちろん」とか「いうまでもなく」という表現が多くなるのである（一二三頁）。

#### 改革批判のレトリック

以上、イデオロギーに内包される論理とレトリックについて、イーグルトンの議論を紹介しつついくつかの特徴を明らかにしてきた。続いて、アルバート・O・ハーシュマンの議論を検討しよう。

ハーシュマンは、支配的イデオロギーが改革に反対して現状を保守するための論理を、三つのタイプに分けて分析している。<sup>19)</sup>第一が逆転（逆効果）テーゼであり、その基本的論理は、「政治的、社会的、経済的秩序の一定の特徴を改良しようとするどんな目的意識的な行為も、それが直そうと臨んだ状態をいっそう悪化させることに役立つだけである」というものである。第二が、無益テーゼであり、それは、「社会的変革のためのどんな試みも甲斐なく終わらざるをえない」と主張する。つまり、改革の試みは何の利益ももたらさないということである。第三が危険性テーゼであり、それは、「目的とされた変革や改革の代価は余りに高価であり、それ以前に成し遂げられた貴重な成果を危険にさらす」

<sup>19)</sup> アルバート・O・ハーシュマン『反動のレトリック』（岩崎稔訳、法政大学出版局、一九九七年）以下では、本書からの引用は、ページ数のみ本文中に示す。

と主張する（八頁）。

この三つの論理を、ハーシュマンは、「反動のレトリック」と呼んでいるが、基本的性格は、あらたな政策に反対する論理である。したがって、それにもつづいた言明は、かならず大衆（あるいは人間一般）の保守的心理を刺激し喚起するレトリックをとまなうはずであろう。ここでは、一例として、現在の右翼的ポピュリズムのレトリックを考える上で重要な背景となっている、福祉国家をめぐる、危険性テーゼがいかなる論理とレトリックをもつものであるのか、みてみよう。

まず、ハーシュマンによれば、「民主主義は自由を危機に陥れる」というテーゼが危険性テーゼの一つの典型である。民主主義とは「普通選挙制度による政治参加の前進」を意味し、自由とは、「生命、自由、財産に対するもつて生まれた権利」を指している（一〇〇—一〇一頁）。「民主主義をめざす運動が個人の自由を危機に陥れる」という論理は、イギリスにおいて最も強く主張された（一二六頁）。すでに個人の自由が確立されていた十九世紀のイギリスでは、民主主義をめざす運動、つまり選挙権拡大運動が個人の自由を脅かすところえられていたからである。たとえば、一八三二年、一八六七年の選挙法改正に反対する演説は、すべて、自由を守るというスローガンを掲げ、民主主義が自由を侵害する、と非難した。そのときの自由とは、財産を所有し増やす権利のことであった（一〇九頁以下）。

福祉国家は、こうした民主主義化の運動の帰結として、社会主義に対抗して形成されてきた。ハーシュマンは、これに対する危険テーゼの代表的理論として、フリードリヒ・ハイエクの『隷従

への道』を例として論評する（二二八頁以下）。ハイエクの論理の根幹は、政府の管轄範囲を拡大しようという潮流は、すべて自由を脅かさざるをえない、というものである。すなわち、民主的政府は合意にもつづくことが必要であるが、国民が合意できる政策は限定される。それを超えた国家活動はかならず強制をとまない、国民の自由を破壊する。したがって、国家の行為を国民の合意可能なまでに限定しておくこと（小さな政府）が必要であるが、福祉政策はこの範囲を超え、国民の自由を奪うことになる、と。ハーシュマンによれば、この「自由の危険」テーゼが、福祉政策を攻撃する優れた武器として繰り返し利用されるようになったのである（一二九頁）。

しかし、この主張は、一九六〇年代には、先進諸国ではそれほど信用されなかった。民主的政府と、経済安定や成長を保証するケインズ型経済運営、福祉国家とが「両立するばかりか、ほとんど運命的に互いを補強し合う関係にある」という理解が大勢を占めていた（一二三—一二三頁）からである。

一九七〇年代以降、高度経済成長の終焉と経済的困難の開始とともに、福祉国家に対する危険性テーゼは息を吹き返した。しかし、その危険性の内容が変化した。福祉国家が「民主主義や自由を危機に陥れるというものではなく」、「福祉国家が戦後のめざましい経済的成長を危機に陥れるだろう」（一二三頁）というものに変わったのである。

いずれにせよ、この危険性テーゼの内包する論理は、大衆の保守的心理を刺激する多様なレトリックをともなう主張されるはずである。

## 演説

さて、以上のような論理やレトリックの特徴をもつイデオロギーは、最終的には、議会や街頭における政治家の演説となつて大衆と接触する。議員あるいは有権者大衆を聞き手・受け手とする演説こそ、イデオロギーの具体的効果が現われる場面である。演説の効果は、そのときどきの社会や政治のあり方、メディアのあり方、聴衆の状況など、多様な要素が関わるために、個別の演説について具体的に論じることが必要になる。ここでは、成功する演説のスタイルについて論じた一例として、川上徹也の議論を検討しよう。<sup>20)</sup>

川上は、成功した演説の例として、ヒトラーと橋下徹を取り上げ、政策の具体的内容の是非については言及せず、その演説における、「ストーリーテリングのテクニク」(四頁)を分析した。まず、彼は、人間にとつてのストーリー(物語り)の重要性を確認する。世界中のどの民族にも、神話や民話があるのは、「ストーリー」という形式が人間の記憶に残りやすく、心を動かすことを知っていたからだ」(九頁)と主張する。そして、ストーリーのなかに、人びとを惹きつけ、行動へと促す「ストーリーの型」があると指摘し、それを「ストーリーの黄金律」と名付けるのである。

川上によれば、ルーズベルトもケネディも、ブッシュもオバマも、また田中角栄や小泉純一郎も、この黄金律を使って演説をも、また川上徹也『独裁者の最強スピーチ術』(星海社、二〇一二年)。以下、本書からの引用は、本文中にページ数のみ示す。なお、演説については、本来、メディア論も含めた政治プロパガンダについての議論の文脈の中で扱う必要がある。

し、政治的成功を収めた。<sup>21)</sup> 彼らは、この黄金律こそが「人の感情を揺さぶる一番有効な方法だと知っているからだ」(一〇頁)と主張する。その黄金律とは、「①何かが欠落した主人公が、②なんとしてもやりとげようとする遠く険しい目標・ゴールをめざして、③数多くの障害・葛藤・敵対するものに立ち向かつていく」(五八頁)という三つの要素を含んだストーリーである、というのである。

以下、簡潔に説明すると、まず、主人公に何かが欠落していることが必要なのは、完璧な人間には、もともと感情移入がしにくいのであり、何か大切なものを奪われた、あるいは、なにかが欠けている主人公ががんばるからこそ、応援しようという感情が生まれるからだ(五九頁)、という。また、目標やゴールは、遠く険しい方がよい。遠く険しいほどそれをめざす主人公が魅力的に見える(六〇頁)、と述べる。さらに、主人公には、行く手を阻む敵役が必要である。乗り越えなければならぬ障害や敵対勢力が多く・強いほど、人びとは心を動かされ、主人公やそのストーリーに感情移入するという(六一頁)。

川上の議論は、政策内容の是非を度外視して論じている点に特徴がある。しかし、現実には人びとを動員するためには、そのときどきの課題をどうとらえ、いかなる政策を示すがやはり決定的に重要であろう。とはいえ、政策内容の諸論点を飛び越えて、リーダーと一体化する心理的飛躍が生じていることも事実である。人びとを惹きつけ、行動への心理的飛躍を促すためのストーリー

<sup>21)</sup> 川上徹也『あの演説はなぜ人を動かしたのか』(PHP新書、二〇〇九年)参照。

リーダーが、演説に不可欠ではある。

### 簡便な意志決定（リーダーとの一体化）

ポピュリストのイデオロギーは、「人民」を至高の価値とするために、本質的に自由主義的ではなく、民主主義的性質をもつ。そこでは、「多数派の専制」という自由主義的論理の入る余地はない。しかし、ポピュリズムには、かならず「リーダーへの委任の論理」が含まれている。このリーダーへの委任をどう考えるか。上述の、リーダーと大衆との一体化は、従来、群集心理の問題として論じられてきた。また、〈空虚なシニフィアン〉の典型がリーダーであることについてはすでに前稿において指摘してきた。ここでは、大衆とリーダーとの一体化について考えるために、現代社会に特有の意志決定方法、行動の仕方を論じた社会心理学者ロバート・B・チャルディーニの議論を参照しよう。<sup>(22)</sup>

チャルディーニによれば、そもそも人間は、ものごとについて何か決定を下すときには、「利用可能な関連情報をすべて利用するわけではなく、全体を代表するほんの一部の情報だけを使う」（三二五頁）ものである。つまり、情報を処理する一種の簡便法を用いているのである。現代の人間は、科学技術の発達によって、以前と比較して、はるかに多くの情報を入手できるようになってきた。他方、人間の情報処理能力はそれほど発達していないために、驚異的な速度で増大した膨大な数の情報を適切に処理できず、「この種の簡便法をいっそう多く使うことを余儀なくさ

れている」（三二五頁）。

もちろん、人間は、動物と異なり、はるかに多くの情報を自分で判断し行動する能力を発達させてきた。しかし、この能力にも限界がある。社会の動きの早さに合わせて効率性を求めるために、「豊富な情報を基礎にして時間をかけて行なう洗練された意志決定」（三二六頁）は困難になる。

チャルディーニによれば、「現代人の日常生活のスピードがかつてないほど速く」（三二八頁）なっているために、思考を節約し、簡便な方法をとらざるをえなくなっている。多数の情報をむしろ捨象し、「信頼性が高いたった一つの特徴だけに注意を向けるようになっていく」（三三〇頁）のである。そのために、自動化された行動、ステレオタイプによる判断が多くなり、判断の仕方が、いわば動物的なものに退化しているというのである。周囲の人びとの行動に同調するのもそうした行動の一つである。これらの行動のうち、リーダーを信頼し、服従し、その意向に沿って行動するというのは、最大限に思考を節約できる、簡便な意志決定の方法なのである。

こうした現代社会の特徴と簡便な意志決定を求める人間の性質とがあいまって、リーダー待望のムードを蔓延させることになる。こうしたムードを利用して、右翼的ポピュリズムはそのイデオロギーを大衆に浸透させ、動員力を発揮するのである。

### V むすびに代えて

<sup>(22)</sup> ロバート・B・チャルディーニ『影響力の武器——なぜ、人は動かされるのか』（社会行動研究会訳、誠信書房、一九九一年）以下、本書からの引用は、本文中にページ数のみ示す。

本来、ポピュリズムは、明確な未来像・国家像をもっているわ

けではなく、右翼的な国家像も、左翼的な国家像もポピュリズムと結びつくことがある。本稿がテーマとしている右翼的ポピュリズムのイデオロギーにおいては、いかなる未来社会が想像されているのだろうか。

すでに、前稿において、右翼的ポピュリズムのイデオロギーは、不分明なところがあり、さまざまな要素が混在していることは確認した。右翼的ポピュリズムのイデオロギーは、いわゆる極右的国家像を設定し、それとの比較においてのみ、それとの異同を確認することによってのみ把握することができるものであろう。すでに、前稿において、<sup>(23)</sup> 右翼的ポピュリズムを「極右」として定義する理論について検討した。それを基礎としながら、極右の明確な志向とは何かを明らかにし、それと右翼的ポピュリズムの特徴とを比較することが必要になる。闘争状態（ホッブズの自然状態）としての世界、そこにおける闘争（戦争）単位としての国家というとらえ方が、両者に共通する思想的核心なのではなかろうか。そして、右翼的ポピュリズムの議論を論理的に詰めてゆけば、極右と同じ未来像・国家像に向かわざるをえなくなるだろう。結局、右翼的ポピュリズムの議論は、極右的国家像に収斂するのではないか。これを明らかにすることが今後の課題となる。

付記

本稿は、JSPS科研費23530138の助成による研究成果の一部である。

<sup>(23)</sup> 拙稿「『極右』概念の再検討」青森法学会『青森法政論叢』第一一号、二〇一〇年。